

●新学長紹介 かきぬき ひろし 笠貫 宏



東京女子医科大学学長

トリイサイエンス。二〇一〇年に開設した本邦初の共同大学院である東京女子医科大学・早稲田大学共同大学院において、医療レギュラトリイサイエンスの学問体系化及び人材育成に取り組んだほか、官庁の審議会・部会などの活動を通じて国の施策や運用改善に携わってきた。

東京女子医科大学は、一九〇〇年の吉岡彌生による創設以来、「至誠と愛」の理念のもと、医学教育において常に先導的役割を果たしてきた。二〇一三年、世界医学教育連盟グローバルスタンダードに基づく国際外部評価を日本で初めて受審、高い評価を受けた。

宮崎俊一前学長の退任に伴い、二〇一三年九月一日付で学長に就任した。笠貫新学長は一九四三年福島県生まれ。一九六七年千葉大学医学部卒業後、東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所内科入局。循環器内科学講座主任教授、同大学附属日本心臓血圧研究所長を務め、二〇〇八年に定年退任。その後早稲田大学理工学術院教授を経て就任した。博士（医学）。

専門は循環器内科学、医療レギュラ

を目指す。

●連盟二コース

「私立大学振興大会二〇一三」

開催

日本私立大学団体連合会（会長＝清家篤慶應義塾長・日本私立大学連盟会長）、日本私立短期大学協会並びに日本私立高等専門学校協会では、私立大学などが取り組むべき課題などの共通理解を深めるとともに、平成二十六年度私立大学関係政府予算と税制改正に係る私立大学側の要望実現に向け、広く国民に理解と支援を働きかけることを目的として、「私立大学振興大会二

大東博文部科学大臣のあいさつを来賓



〇一三」を開催した（平成二十五年十一月二十八日、東京ガーデンパレス）。同大会では、下村博文文部科学大臣からの来賓のあいさつをいただき、「わが国の知識基盤社会を先導し、地域に貢献する私立大学・短期大学」今こそ、私立大学「短期大学の時代」をテーマにパネルディスカッションが行われた。小松親次郎文部科学省高等教育局私学部長をはじめとするパネリストから、それぞれの立場からの私立大学などのあり方に関する意見が述べられた。また、昨年度に引き続き、テレビ会議による参加も行われ、全国の私立大学・短期大学関係者約三〇〇人（テレビ会議含む）のフロア参加者と共に国への要望などを述べた。

大会の締めくくりでは、納谷廣美連合会副会長から、当日参加の私立大学など関係者の総意として、「私立大学のアクションプラン」に基づく「決議」が示され、小松私学部長に手交した。平成二十六年度私立大学関係政府予算などに係る私立大学側の要望の実現と、高等教育の八割を担う私立大学などを中心とした教育政策の大転換を図るべきであることが強く確認された。

第350号 (平成25年度5月号)

【特集】

今こそ、IRの導入を！



【座談会】

学生の主体性を引き出す大学教育とは

【小特集】

自然災害にどう向き合うかー東日本大震災その後

【インタビュー】

三宅宏美氏 (ウェイトリフティング選手)



奇数月20日(年6回)刊行

第351号 (平成25年度7月号)

【特集】

学生に海外体験をー留学のススメ



【座談会】

世界で活躍する人材を養成するための真の外国語教育とは

【小特集】

大学評価と改革の展望

【インタビュー】

朝井リョウ氏 (作家)

第352号 (平成25年度9月号)

【特集】

求む！理系女子のちから



【座談会】

社会人の「学び直し」に大学は応えうるのか

【小特集】

国内キャンパスにおける国際交流の推進

【インタビュー】

有賀明美氏 (ウェディングプランナー)



日本私立大学連盟

WEBサイトにて、全文を無料公開しています。

詳細は、

<http://www.shidairen.or.jp/>

※第344号 (平成24年5月発行) のものから、対応しています。

第353号 (平成25年度11月号)

【特集】

奨学金政策の今、そしてこれから



【座談会】

サービス・ラーニングの学びが学生にもたらすもの

【小特集】

今、大学は「平和」にどう取り組むかー学徒出陣70年の節目に

【インタビュー】

岩崎絃昌氏 (古美術商・西洋アンティーク評論家)

●「改正労働契約法に関するシンポジウム」開催

平成二十五年十一月十一日、TKP市ヶ谷カンファレンスセンターにおいて「改正労働契約法に関するシンポジウム」を開催した。

八六の加盟大学より一九四名の教職員が参加し、改正労働契約法に関する私立大学の課題と対応策について、人事労務管理の観点から留意すべき事項について報告・講演、フロアとのディスカッションにより、理解を深めた。

●財務・人事担当理事者会議第二回開催

平成二十五年十一月二十九日・三十日の二日間にわたり、神戸ポートピアホテルにて「これからの私立大学における人事・給与制度のあり方」をテーマに開催した。

六一法人九五名が参加し、雇用形態の多様化の視点に基づき、柔軟な勤務形態やキャリア形成などの長期的な視野に立った教職員の人事制度、職務の内容を勘案した給与制度のあり方について考える機会とした。

□最近の大学においては、学生が自ら学ぶ学修の重要性が再認識され、それに伴って大学図書館はそのような学生たちに支援を行うことが求められている。近年、整備が進められているラーニング・コモンズや図書館職員などによるレファレンスサービスなどの学修支援は、このような要請に応える動きであろう。

今号の特集では、大学図書館における学修支援と環境の整備について特徴的な六つの大学から論文をたまたわった。

先生方の論文を拝読し、あらためて大学図書館が学生たちの主体的な学びの場へと変化していることを感じた。それと同時に、今後大学図書館が一層学修支援を充実させていくことに伴って、大学の各部門との連携、人材の活用など全学的体制の構築、正課教育との連携強化、カリキュラムとの密接な連動をいかに構築するかなどの課題も多いということも感じた。しかし、いずれにしても大学図書館は、これからも大学での学びを変え、人材育成力を高める存在

(場)であり続けると思われる。各大学のこれからの取り組みに期待するとともに、私自身もそれに対応するための意識とスキルを向上させていきたいと考える。(広報・情報部門会議(大学時報)委員・関西学院大学入試部課長補佐 筒井弘幸)

□人の学習意欲を強く刺激するものは何か。近年の教育改革は、この疑問に対する答えを探る旅であるように思う。かつてはいい大学に入ればいい就職、という神話があり、今はスキルと人間性を高めれば市場評価の高い「人材」に、という考え方もある。だがそれらは、本当に学生の意欲を刺激してきたのだろうか。

今号の小特集を読むと、オープンキャンパスで高校生が在学生と出会い、身近なロールモデルとして意識していることがわかる。出願、合格、入学につながることも多いようだが、実は加えて重要な示唆があるように思う。「あの人のようになりたい」というあこがれは、強ちに学習意欲を高め、さらにはあこがれの対象となる在学生も意欲を向上させるといふことだ。

大学の授業やカリキュラム、施設も、近づきたい対象としての在学生を通して見るからこそ、その真価と

魅力を理解できる。在学生を教育する意味は実に多面的だ。(広報・情報部門会議(大学時報)委員・立教大学学生部学生厚生課 木村健太)

□幸福度ランキングアップで結婚式を二回にわたり取り上げた。学生生活を過ごしたキャンパスでの挙式は、大学は卒業後も学生の人生に意味をもつことの一つの象徴と言える。また、正課授業での被災地出身の新郎新婦を迎えた結婚式、周年事業の一環としてのメモリアルウェディングなど、私立大学ならではの多様な取り組みをご紹介いただいた。新郎新婦はもとより、お二人に寄り添い、支える多くの人々の思いが伝わる温かい記事となった。

インタビューは、伊勢神宮禰宜の小堀邦夫氏にご登場いただいた。飛鳥時代から受け継がれた二〇年に一度の式年遷宮には、日本独自の精神文化の継承、いつの時代も変わらない永遠性の実現という考え方が根底にあることを教えていただいた。

どちらも「新たな出発」というキーワードで、新年号にふさわしい企画となった。二〇一四年も、タイムリーな、また身近な情報を読者の皆様にお届けしたい。(日本私立大学連盟事務局 権藤和代)

